

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム ー変容するフランス政治と「国民戦線（FN）」に ついて考える（４）

畑 山 敏 夫

はじめに

1. フランス社会の変容と右翼ポピュリスト政党
 - （１）「栄光の30年」の終わりと政治の変容ー安定した政治の終焉
 - （２）フランスの経済社会の変化と新しい分断の時代へー「二つのフランス」へ
 - （３）移民問題の争点化ーFN の躍進を支えたもの
 - （４）政治システムの変容ーFN というオルタナティブ
2. 政治家マリーヌ・ルペンを理解するためにールペンの娘に生まれて
 - （１）マリーヌ、親に貰いし名はー「共和国の悪魔」の娘に生まれて
 - （２）弁護士から政治の世界へーマリーヌと FN というマイクロコスモス（以上、第50巻第3号）
3. ルペン時代の FNー二つの FN の連続性を理解するために
 - （１）周辺的政党からの脱却ー鳴かず飛ばずから突然の躍進へ
 - （２）「新右翼（la Nouvelle droite）の加入と FN の刷新
 - （３）「新右翼」の FN 改革ー政党イメージ転換へ
 - （４）党の分裂と FN の危機（以上、第50巻4号）
4. 「危機の FN と党の刷新ー「マリーヌの FN」への道
 - （１）再生に向かう FNー分裂の後遺症を抱えながら
 - （２）抵抗勢力の排除へ
 - （３）党の地方で拠点を築くーエナン・ボーモンでの政治家修行
 - （４）新党首マリーヌ・ルペンの誕生と党の刷新
5. 「マリーヌの FN」の「古さ」と「新しさ」
 - （１）FN は変わったのか？
 - （２）変わらぬポピュリズム路線

(3) 「脱極右政党」への長い道

(4) アウトサイダーからインサイダーへ－FNの適応戦略

(5) FNの変化と連続性－「節度あるオルタナティブ」へ

(以上、本号)

5. 「マリーヌのFN」の「古さ」と「新しさ」

(1) FNは変わったのか？

『ルモンド』紙(2011年3月29日)に「FNは他党と同じ政党になったのか？」という記事が掲載され、『シュッド・ウエスト』紙(2011年4月10日)にも「FNは変わったのか？」といった記事が見られ、FNの変化に関心が高まっていることが分かる [Dézé 2012 : 22]。

社会学者S・クレボン (Sylvain Crépon) は『新しいFNの真ただ中で
の調査 (Enquête au cœur du nouveau Front national)』というタイトルの著書を書いている。そのタイトルに使われている「新しいFN」という言葉が示しているように、「マリーヌのFN」の「新しさ」がしばしば強調されている。そのような表現は、FNがルペン時代から大きく変わったことを示唆している。確かに、「マリーヌのFN」の「新しさ」のイメージが流通していて、それがFNの選挙での伸張に寄与していることは否定できない。マリーヌ自身が父親時代のFNとの違いを強調し、党執行部の世代交代を含めて「ルペンのFN」との断絶が顕著であるのも確かである [Igounet 2014 : 448]。

現実にはFNでは、ルペンが象徴している旧世代が次々と党から去っていき、マリーヌに代表される新世代が党組織を支配している。世代交代が「新しさ」の印象を与えていることは明らかである。

だが、FNの「イデオロギー的刷新」については留保が必要である。イデオロギーや政策、言説については、「マリーヌのFN」が本質的に「ルペンのFN」と異なっているのかという点で否定的な見解が多い。例えば、政治研究者A・デゼ (Alexandre Dézé) はイデオロギーや組織、イメージ戦略にわたる連続性を強調し [Dézé 2016]、社会党の国会議員と活動家たちが結成した団体「強力な左翼」も、FNは「その外形において、その点だけで

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

変わった」のであり、イデオロギーやプロジェクト、政治的ポジションについては一貫していると指摘している [La gauche forte 2014 : 13-17]。

結論的に言えば、マリーヌ党首のもとでFNは変わったのかといえ、変化している面と連続している面がある。FNは組織やイデオロギーの面では連続性を示しているが、イメージ戦略を通じて変化が演出されているといえる。マリーヌが党首に就任したことの最大の成果は、FNが変わりつつあり、他の政党と同じく危険でも脅威でもないという印象を与えたことである。つまり、FNの「新しさ」はイメージ戦略の成功の賜物であり、決して、その本質は変わっていない⁽¹⁾。

正確に言えば、第三章で指摘したように、多くの点で「マリーヌのFN」は「メグレのFN」を継承している。公式的には否定しているが、組織構造や政策、イデオロギーの面で、マリーヌはメグレの党の成果を摂取している。その意味で、FNからメグレは去ったが、メグレ主義は分裂を超えて党のなかで生き延びているのである [Igounet 2014 : 352]。

本節では、FNの連続性に焦点を当てて「変わらないFN」の側面、つまり、現在のFNが「メグレのFN」を継承していることを確認する。それは、変わらない基盤の上に「新しいFN」のイメージ戦略が展開されているということを明らかにすることであり、第3章で詳説した「メグレのFN」との連続性を確認する作業である。

移民、安全、失業、変わらぬプロパガンダの核

今日まで、FNのプロパガンダの核は移民問題と関連したテーマ群であった⁽²⁾。最近では、移民問題一般よりもイスラムに焦点を当てているが、移民・難民の大量流入が国民共同体にとって脅威であることには変わりはない。そして、そのテーマは今日におけるFNの復活にも貢献している⁽³⁾。

新世紀のFNにとっても、治安や移民の問題が有権者に訴える最大のテーマであり続けていた⁽⁴⁾。2012年の大統領選挙はマリーヌにとっての初陣であったが移民問題を重視する路線を継承している。

現在でも、移民問題に関しては、FNにとって有利な環境が持続している。「人権諮問全国委員会(CNCDH)」が2009年と2010年に実施した調査では、「今

日のフランスでは自国にいる気がしない」という回答が41%から50%に増加し、「移民が多すぎる」という意見も47%から56%に増え、「一定の期間定住している非ヨーロッパ系外国人への地方参政権の付与」に賛成する回答は59%から48%に減少している。2010年には国民的アイデンティティやブルカの着用禁止、犯罪を理由とした国籍のはく奪といった話題がメディアを賑わせ、外国人嫌いや反移民の感情が高まっている [Dézé 2012 : 14]⁽⁵⁾。

移民の存在が国民共同体にとって脅威であることは、今日までFNの一貫した主張であった。そのような党の伝統的立場を踏襲して、マリーヌは、移民対策として、不法移民を追放してゼロにすること、不法移民の正規化（滞在合法化）の禁止、雇用と住宅への「国民優先（*préférence nationale*）」（今日は *priorité nationale* という言葉を使用）原則の適用、家族呼び寄せの禁止、出生地主義の廃止、国籍取得条件の厳格化、亡命権の抜本的な制限などを求めている [Perrineau 2014 : 136, Ivaldi 2012 : 99]。

また、マリーヌは、大量の移民導入について、自己利益のために国民を裏切るエスタブリッシュメントの責任を告発している。「フランスでは経営者の要求の下に、1970年代にフランス人労働者の賃金を抑制する手段として移民を活用してきたが、人口減少に直面したフランス政府は労働移民を定住移民に転換させた」「その結果、欧州外からの移民、主要にはムスリム系移民が数の力によってフランスの社会と価値を変容させる圧力となっている」と政府の移民政策を糾弾している [Liszakai 2011 : 147]。

有権者の不満を動員する有効な道具になっているのが、移民が享受している「特権」への批判である。1990年代にメグレたちが喧伝した「自国民優先」「反フランス人的人種差別」といった論法、多くのヨーロッパの右翼ポピュリズム政党が共有している「福祉ショーヴィニズム（福排外主義）」と呼ばれるロジックは、マリーヌの下でも政治的に利用されている⁽⁶⁾。

2017年の大統領選挙でも、近年におけるテロの頻発もあって治安問題が重要なテーマとなった。FNは移民問題とリンクさせて早くから治安問題を争点化してきたが、FNにとって、そのテーマは一貫して有権者に訴える有力な資源であった。そのことは「マリーヌのFN」でも不変で、彼女の言説が世論、特に民衆層で影響力を発揮しているのは、国民における治安悪化の感

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

情の広がりによっても説明できる [Alidières 2014 : 23-24]⁽⁷⁾。

移民・難民問題が犯罪やテロの問題と結び付けられることで、秩序と權威の強化、移民・難民の抑制という FN の言説が説得力を高めている。マリーヌとっても移民問題が最重要の課題であることには変わりはない。イスラムやテロ、難民といった新しい要素を付け足しながら、失業や治安、社会福祉、国民的アイデンティティと関連させることで、移民問題は「マリーヌの FN」にとっても集票力のあるテーマであり続けている。

新しい人種主義と同化の論理－異なる存在の差別と排除

生物学的差異ではなく、文化や伝統の違いを根拠に事実上は差別と排除を肯定するという現代的な差別の論理は、「新右翼」から「マリーヌの FN」にも継承されている。

マリーヌは自伝(『流れに抗して』)の中で、同じような考えを表明している。「統合」という考え方では、フランスの文化や伝統に抵触しても生活様式や言語、服装の伝統、価値観を維持し、アイデンティティを守ろうとする移民を同化に向かわせることはできないと、「統合」という考え方を批判している [Crépon 2012 : 182-184]。マリーヌの立場は、移民のアイデンティティやフランス社会の多様性の否定と、同化主義に行き着くものである。

ただし、マリーヌの立論は慎重で巧妙である。例えば、彼女は極右の従来からの伝統に反してライシテ(政教分離)を強調している。移民を不用意に攻撃すれば人種主義や外国人嫌いの非難を浴びることになる。ゆえに、移民ではなく移民の信仰、フランス共和制の基本的価値である世俗主義を認めないこと、フランス社会への統合を拒むイスラム信仰を理由に差別的取り扱いを肯定するのである。そのことで、FN の反移民闘争から人種主義と外国人嫌いの色彩を払拭して、FN への抵抗感を緩和することが意図されている [Goodlifee 2015 : 124-125]。

「マリーヌの FN」は本質的に排除と同化主義の立場をとっている。FN のインターネット・サイトに掲載されている移民政策を見れば、国籍取得における出生地主義の廃止、フランス国籍法の根本的な改革、同化の証明やフランス語の習得、合法的で長期の滞在期間など帰化条件の厳格化といった主張

が展開されており、結局は同化か排除かという二者択一に帰結している [Crépon 2012 : 185-186]。

結局、「マリーヌのFN」が「差異」を肯定しているかのように見えても、それは普遍主義的視点からではなく、フランス人の間での「差異」の承認にすぎない。結果として、「マリーヌのFN」は文化的差異を根拠とし排除や差別的取り扱いの肯定に行き着き、その点では「ルペンのFN」と本質的な違いは見られない [Crépon 2012 : 295]。

(2) 変わらぬポピュリズム路線

FNは、移民問題を核に既成政党の政治を激しく批判してきた。「異議申し立てのポピュリズム」は民衆の側に立ってエリートを告発する手法を特徴とするが、「ルペンのFN」では、文革時代の中国共産党幹部への糾弾から着想を得て「四人組 (bande des quatre)」として既成政党 (共和国連合、フランス民主連合、社会党、共産党) を一体のものとして攻撃してきた。マリーヌも「異議申し立てのポピュリズム」の手法を踏襲して、「国民運動連合 (UMP)」 (現在は共和党と改名) と社会党 (PS) の略称から UMPS という合成語を造って、左右の主要政党を一纏めにして批判している。形式上は左翼と保守の陣営に分かれていても、UMPSはグローバル化を推進することでは一致し、ともに民衆の生活や雇用を犠牲にする新自由主義にそった政治を行っている。マリーヌは、FNが「UMPS システム」と闘うことを明言している [Ivaldi 2012 : 108]。

民衆の側に立ち、エリート支配を糾弾するポピュリズム的姿勢はマリーヌの下でも一貫している。それは、「マリーヌ・ルペン、国民の声、フランスの精神」という党のスローガンに表現されているが、マリーヌ自身も2012年12月に放映されたテレビ番組の中で、「ポピュリズムがエリートに対して国民を守り、エリートに首を締められ、見捨てられた人々を守るという意味であるなら、私はポピュリストである」と断言している [Ivaldi 2012 : 107]⁽⁸⁾。

国民の「護民官」として－「社会的右翼」路線の継承

そのような民衆の側に立つ姿勢は、社会問題を取り上げ、民衆の利益を擁

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

護する姿勢として示されている。1990年代に、FNは支持層の「プロレタリア化」に対応して、政策理念と言説を「左傾化」させていった。グローバル化のなかで脅かされている民衆層の生活と雇用を防衛することに力点が置かれた。グローバル化の進展によって格差と分断が表面化するなかで、FNの訴えはこれまで以上に民衆層に浸透を見せている⁽⁹⁾。

フランスは、先進国の中では現行の資本主義体制に対する批判が最も受容されている国である。27か国で実施された調査(2009年6月19日-10月13日)では、フランスでは43%が現行の資本主義体制は間違っていて、他の体制が必要であると回答している。イタリア(29%)、スペイン(29%)、イギリス(19%)、アメリカ(13%)、ドイツ(9%)と比べても、フランスでの資本主義体制に対する批判意識の強さは印象的である。また、政府の介入による企業への規制についても76%が支持し、大企業に対する政府の厳格な監督(57%)に関してもフランスがトップであった[Perrineau 2012: 147-8]。新自由主義的資本主義を問題視し、少なくともその修正が必要であるという認識は国民に広範に共有されている。

そのような国民意識を背景に、「マリーヌのFN」は社会問題を重視する「社会的右翼」の路線を鮮明にしている。購買力の低下、失業の増加や非正規雇用化といった社会経済状況に既成の左翼勢力が有効に対応できないなかで、FNは労働者を始めとした民衆層の利益代表として自己をアピールするようになった。

2010年の地域圏議会選挙時に、マリーヌはシトロエンの工場前で「産業の危機、フランス人労働者は体制によって裏切られている」というビラを撒き、「社会的」で「民衆的」であることをアピールしている[Fourest et Venner 2011: 140]。

2007年の大統領選挙で、ルペンはFNが弱者(petits)、無名の人々、決定権のない人々、貧しい労働者、年金生活者の擁護であると呈示しているが、そのような民衆の味方としてのFN像は、選挙キャンペーンの責任者であったマリーヌの演出であった[Igunet 2016: 39]。2008年にリーマンショックが金融危機を引き起こすと、マリーヌは新自由主義への批判を強化し、「社会的右翼」として民衆の生活と雇用を防衛するために、国家が有効に介入す

ることを求めている。

「ブルーマリンの波は社会的波」と銘打った演説で、マリーヌは労働に基づく社会的保護のメカニズムを再考すること、産業の再生と空洞化の流れを逆転させフランスへと産業を回帰させることを訴え、経済的・社会的保護主義の立場を鮮明にしている。賃上げ、公共サービスの民営化反対など、親労働者の立場を鮮明にしている [Fourest et venner : 2011 : 168-169]。

2011年4月にFNは作成中の経済プログラム案を公表するが、そこにはグローバル化の犠牲者に社会の富を再配分することが主張され、「イデオロギー的主張の左傾化」と言われるような姿勢が示されていた。具体的には、石油やガスの大企業に対する例外的に重い課税、公共サービスの擁護、国際的金融投機との闘争、銀行部門の規制、賃金の物価スライドといった主張が展開されている [Ivaldi 2012 : 110-111]。

経済社会的危機が発生し、既成左翼の民衆層を守る姿勢と能力が減退しているとき、その間隙を縫ってFNは「社会的右翼」であることをアピールし、「護民官」的役割を引き受けようとしてきた⁽¹⁰⁾。既成左翼がオルタナティブとしての魅力を喪失しているとき、FNが民衆層の中で左翼代行的な役割を果たしつつある。

左翼代行的政党へ

FNの民衆層への浸透は、左翼の同社会層での不振とパラレルな現象であった。既成左翼政党は、政権交代を繰り返すなかで現実主義化、穏健化していった。特に、政権に就いた社会党は新中間層へと支持基盤を移し、新自由主義と欧州統合を基本的に受容することで変革政党としての内実を喪失していった。失業や非正規雇用の増大、購買力の低下、産業の空洞化、地域社会の衰退といった民衆の苦境に有効に対処することはできなかった。結果として、不満と不安を抱える民衆層が向ったのはFNであった。

FN支持層の「プロレタリア」化は、左翼支持層の「ブルジョワ化」に対応していた。1988年の大統領選挙第1回投票で、ミッテランは労働者票の41%、サラリーマン票の40%、公務員票の40%、管理職・知的職業票の29%を獲得していた。2007年の大統領選挙第1回投票では、社会党候補S・ロワイヤル

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

は労働者票の25%, サラリーマン票の29%, 公務員票の29%しか得票できていないが、管理職・知的職業では25%と踏みとどまっている。民衆層や公務員での影響力の低下は大きく、社会党支持者の「脱プロレタリア化」は顕著である。社会党はもはや、民衆層の政治的代表ではなくなっている[Perrineau 2012: 82-83]⁽¹⁴⁾。

マリーヌは、現実主義化した既成左翼が労働者の利益を防衛することを放棄していることを非難している⁽¹¹⁾。大量の安価な労働力の導入が労働コストを下方に押し下げている現実に対して、左翼と労働組合は反対することなく、グローバル化や民営化の推進、35時間労働制の導入といった労働者と民衆に不利な政策を推進してきた。左翼は労働者を見捨てて、比較的裕福な社会層の味方になってしまっているのである [Marine Le Pen 2006: 198-200]。

左翼に取って代わって、FNは雇用と購買力へのグローバル化の影響、雇用の空洞化、不平等の拡大、国家の役割の再確立といった社会的争点を積極的にアピールした。民衆層の苦境に寄り添い、ポピュリズム的扇動を展開することで、新たな支持の拡大を図っている [Philippot 2011: 51, Delwit 2012: 34]。

移民と治安の問題を梃子に躍進をとげたFNにとって、伝統的な社会経済問題は手薄な領域であった。グローバル化の進展によって、失業や不安定雇用の増加、産業の空洞化などへの対応が迫られるなかで、FNは「不得意科目」を克服することを迫られた。その意味で、マリーヌが経済社会問題に力を入れるのは、そのようなハンディを意識してのことであり、その結果、FNは民衆層の利益を守る「愛国的無産運動」の様相を帯びている。

そのような「社会的右翼」への変身を可能にした切り札が、結党当初から発想としてもっていた「自国民優先」のロジックであった⁽¹²⁾。国民の社会経済的利益を優先的に防衛すると主張することで、FNは階級的観点ではなく、エスニシティの視点から読み替えた⁽¹³⁾。つまり、FNは「階級的利益」として左翼に独占されてきた社会経済的問題にアプローチする独自の方法を手中にしたのである。労働者と民衆の階級的利益を見捨てた既成左翼政党に対して、FNは旧左翼支持者の受け皿になることに成功した。

反グローバリズム時代のポピュリズムー国民共同体の再建

2017年の大統領選挙で、EU 統合と共通通貨ユーロが重要な争点になったように、国境を越えた国民国家の枠組みを超えた経済金融の現実が国民世論を二分している。そのなかで、FN がグローバル化と併せて、EU 統合とユーロを大衆宣伝の争点として重視していることは言うまでもない。

FN が反グローバル化のテーマに取り組むのは最近に始まったことではない。1990年代にはメグレたちの下で反グローバリズムは主要な争点に据えられていた。2000年代に入ると反 EU の主張を強化し、2005年の欧州憲法条約案をめぐる国民投票では反対陣営で大きな影響力を発揮した。そのような流れの延長線上に、マリーヌもグローバル化、EU 統合に抗して、民衆の側に立って闘う姿勢を鮮明にしている。

2011年8月11日の記者会見で、マリーヌは「ウルトラ・リベラリズム、自由貿易、経済への人間の従属、近視眼的発想、最大利潤のヒステリックな追求、上流階級のヴァーチャルな利益などのために常識と現実経済を犠牲にするイデオロギー」としてグローバリズムを断罪している [Ivaldi 2012 : 108]。

グローバル化の本格的な進展のなかで、国家を外部に開くか、それとも閉ざすかという選択が新たな対立軸として浮上している。ボーダレス時代のなかで、大量の移民・難民と共存することに不安と違和感を抱く国民は増えている。2012年の大統領選挙でマリーヌに投票した有権者の98%が、「以前のように自分たちの国にいるとは感じられない」と、そのような実感を表現している（オランド投票者41%、メランション投票者38%）[Perrineau 2014 : 145]。

2017年の大統領選挙で見られたように、FN はグローバル化の弊害（産業の空洞化、輸入農産物との競争）に苦しむ地域で票を伸ばしている。また、EU 統合に対しても、今日ではフランスにおける欧州懐疑主義の旗手になっている（フランスでは「主権主義 (souverainisme)」という呼称が使われている）。イギリスの EU からの離脱が決まり、反 EU を叫ぶ右翼ポピュリズム政党がヨーロッパ諸国で台頭するなど、EU への逆風が吹き荒れているが、それが「マリーヌの FN」にとって追い風になっていることは間違いない、（なお、グローバル時代のポピュリズム政党である FN については独立した

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)
章を設けて詳説する)。

(3)「脱極右政党」への長い道－「新しいFN」という演出

前節では、「マリーヌのFN」が「ルペンのFN」、正確には「メグレのFN」の路線を基本的に継承していることを確認した。本節では、「マリーヌのFN」の「新しさ」について検証してみたい。マリーヌ自身が父親時代との「違い」を強調し、党人事でも世代交代を進めるなど、「ルペンのFN」からの変化を演出してきた[Igunet 2014: 448]。

その作業は「古いFN」のイメージを緩和・払拭すること、すなわち、反ユダヤ主義や歴史修正主義の政党というイメージを払拭して、イデオロギーや言説を穏健化・婉曲化するという作業と、女性党首マリーヌを中心に党イメージをソフト化・モダン化し、共和制や民主主義などの体制的価値を受容することで、穏健でモダンな政党というイメージを築くという二重の課題からなっていた。ということは、「マリーヌのFN」の「新しさ」はイデオロギーや言説の内容ではなく、イメージ戦略の次元にある。

それは何よりも言葉とイメージをめぐる闘いであり、1990年代に「新右翼」知識人たちが設定した路線であるが(第3章参照)、その目的は「普通の政党」として認知されることで有権者の拒絶感・忌避感を緩和することで、新しい支持者を獲得することにあった⁽¹⁴⁾。

FNの新しいリーダー像－マリーヌというショー・ウインドー

「脱悪魔化」という点では、ルペンからマリーヌへの党首交代が最大のイメージ転換と言える⁽¹⁵⁾。コワモテで男性優位の政党というFNに女性党首が誕生したことで大いに注目が集まり、党イメージが変わり始めたからである。

2011年3月号の『タイム・マガジン』に、その年に最も影響力がある100人の人物リストが掲載されているが、そこにマリーヌの名前があった。2011年9月にTF1の番組にマリーヌが出演すると、視聴率は23,3%を記録した。ちなみに、社会党のM・オブリ(Martine Aubry)が出演した時は21,3%であり、マリーヌの方が有名な社会党幹部を超えていた[Dézé 2012: 11]。

第4章で言及したように、メディアでの寵児として、マリーヌは国民の注

目を集め、マリヌの人気は上昇していった。選挙で低迷していたFNは、有権者の受けがよいスター的存在を必要としていた。その点で、マリヌは広告塔としては適役であった。一般的に言って、フランスでは、優しいイメージから女性候補の方が選挙で有利であるといわれているが [Fourest et venner 2011 : 141], 女性党首への交代によって党イメージの変化が期待できた。

マリヌの登場が、FNのイメージ改善に寄与した点を具体的に確認しておこう。第1に、女性党首の誕生は男尊女卑的な極右政党のイメージを転換することに貢献したことである。

FNでは伝統的な家族観や女性観が強く、性別役割分業が肯定されてきた。だが、3人の子供を育てながら働くマリヌの姿によって、男尊女卑で家長制擁護の政党であるというイメージの転換が期待できた [Fourest et Venner 2011 : 142-143]。

第2に、マリヌが党にモダンでリベラルなイメージを与えたことである。2度の離婚経験があり、現在はパートナーと事実婚の関係を選択し、3人の子供を育てながら働くワーキングマザーであるマリヌは、現代的な女性の生き方を体現している。離婚を経験し、働く母親である女性党首の誕生はFNに「モダンな」相貌を与えるものであった。

また、マリヌは妊娠中絶に関して基本的にプロ・チョイス的立場を示し、性的マイノリティの権利を尊重する姿勢もとるなど、従来のFNでは考えられないリーダー像を示している。

第3に、父親と対照的な親しみやすく、明るく気さくなマリヌの性格の効果である。そのような資質は党首就任前から発揮されていた。2004年の欧州議会選挙で当選したマリヌは、「FNの政治家にもかかわらず」「よき同僚 (bonne copine)」という評価を他党の議員たちから受け、欧州議会のカフェテリアや廊下でも「感じがよく開放的なイメージ」を振りまいていた [Machuret 2012 : 65]。

マリヌは父親のように厳格で政治活動に専念するパーソナリティとは異なっていた。ダンスやパーティを好み、決して党務と政治活動だけに没頭することはなかった。これまで苦楽を伴にしてきた親密な取り巻きたちと、マ

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

リーヌは党本部やレストラン、カフェバーで、踊り、歌い、飲むことを何よりも好んでいる [Machuret 2012: 172-173]。

そのような陽気で軟派な党首のイメージは、それまでの暗く硬派な党のイメージを転換することに貢献した。

第4に、新党首マリーヌがメディアとの関係改善に努め、党イメージの改善に利用したことである。

マリーヌの下での FN の変化を象徴しているのが、メディアとの関係であった。マリーヌたちは、「脱悪魔化」戦略にとってメディアとの関係正常化が重要であることを理解していた [Rosso 2011: 9-10]。マリーヌはマスコミや研究者の取材や調査に快く協力する姿勢をとり、メディアとの関係の正常化に努めた。

そのような配慮もあって、マリーヌのもとでメディアとの関係は急速に改善されていった。ルペンは主要なテレビやラジオから締め出され、それを「メディア政治の陰謀」として糾弾してきたが、マリーヌがメディアに登場することで2002年頃から FN はメディアで地歩を築くようになった。そのような傾向はマリーヌが党首に就任してから拍車がかかり、マリーヌのテレビ、新聞などへの出演やインタビューは飛躍的に増加した。父親のように失言をしないことで、マスコミにとっても安心して使える便利な存在になったからであった [Machuret 2012: 78-80]。

メディア上で流布されマリーヌのパーソナリティは、新しい FN の象徴となり、その存在は開放的でモダンな FN の広告塔的役割を果たした⁽¹⁶⁾。

言葉とイメージをめぐる闘いー「脱悪魔化」への取り組み

既述のように、FN の「脱悪魔化」が必要であることが認識されたのは、ルペンが決戦投票に進出した2002年大統領選挙の時であった。決戦投票へのルペンの進出が全国で引き起こした抗議の大合唱が、マリーヌたちに「脱悪魔化」の必要性を痛感させた。かつてオーストリアで自由党が政権参加したとき国の内外で激しい抗議の声があがったように、民主主義にとって危険な政党が政権に近づくことへの強い抵抗感と危機感がフランスでも存在していることが明らかになった。ゆえに、FN は暴力的で危険な政党ではないこと、

民主主義と両立し、政権担当も可能な政党と認知される必要があった。

2011年5月17日に実施されたインタビューのなかで、マリーヌは「脱悪魔化」戦略について次のように述べている。「多くの年月、FNは悪魔の外皮をまといわされてきた。[……] 私が考えていることは、ありのままのFNを示すことである。そのためには透明性を確保し、FNと結びつけられた悪しきイメージに満足しないことが必要である。[……] FNは討論会や夕食討論会を開催し、それをメディアに開放しており、ジャーナリストに何も隠していない。[……] ジャーナリストは、FN党員たちが一般の人々と同じように政治について語り、スキャンダラスなことを言うこともなく、自分たちの気持ちと心、魂と信念を表現する人々であることに気づくだろう。それは、少なくともメディアとFNの関係の正常化に貢献すると、私は考えている」[Igounet 2014 : 373]。

まずは、それまでのステレオタイプのイメージを払拭することが重要であった。FNの党員がブーツと革ジャンを着用し、ヘルメットを被って手に棍棒を持った懐古趣味の人々となく、支持者も愚か者、懐古趣味の人々、人種主義者、臆病者、将来に悩む人々ではないことを党外の人々に理解させることが必要だとマリーヌは述べている [Marine Le Pen 2006 : 253]。

そのためには、FNから反ユダヤ主義や歴史修正主義的言動を追放することはもちろん、語彙の刷新(世俗主義や共和主義の観念にそった言葉の使用)、FNのいくつかの立場の現代化(妊娠中絶、離婚、ホモセクシュエルに関するネガティブな立場の修正)、FN思想の「知性化」(知識人との協力)、党イメージの若返り(2007年の大統領選挙での若い非白人女性を起用したポスターに見られるように)といった様々な配慮がなされていた [Dézé 2012 : 138]。

「脱悪魔化」のためには、表現の婉曲化や言い換えといった工夫も凝らされている。ルペン時代に中心的語彙として使用されていた「自国民優先 (préférence nationale)」という言葉も使用されているが(ただし、préférence nationaleではなく priorité nationale という言葉を使っているが)、「社会的保護主義 (protectionnisme social)」「社会的愛国主義 (patriotisme social)」といった言葉の方を好んで使っている。というのは、極右的ニュアンス(平

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

等主義の否定と外国人嫌い、排外主義)を避けて、平等主義と共和主義の意味を帯びた表現を選択したいからである [Alduy 2016 : 23]。

表現方法だけでなく、政策や言説の柔軟化・具体化によって現実主義的で柔軟なイメージづくりも追求されている。例えば、外国人労働者が過多であるとして強制的帰国や入国の厳しい制限を主張してきたが、これまで外国人労働力の必要性から「移民ゼロ」政策は「非現実的」として放棄されている [Ivaldi 2012 : 99]。

マリーヌは、極右政党ではなく「国民的」な、もしくは「愛国主義的」な政党と見られることを望んでいるが [Liszkai 2011 : 7], 「脱悪魔化」戦略によって FN のイメージが改善されている。

「脱悪魔化」戦略の到達点ー「脱極右化」に向けて

ジャーナリストや政治研究者たちは、これまで FN に、歴史研究や政治研究で定義が定まっていない「極右」という言葉を使用してきた。その呼称は「極右」と名指しされた政党を政治生活の片隅に追いやり、FN も例外ではないが、民主主義の敵として危険視され、忌避されてきた。そのような政治的ゲッターから脱出することが新党首の最大の課題であった⁽¹⁷⁾。というのは、「極右 (l'extrême droite)」という「不名誉なレッテル」を貼られる限り、広範な有権者を結集して政権への道を切り開くことは不可能だと認識しているからである⁽¹⁸⁾。

2001年1月には、「極右」が「小さな脳みそでカーキ色の奇妙な服装や大きな靴を着用し、肌が白くないことを嫌悪する連中であるとすれば、私はそのような人々とは無関係である」と、マリーヌは自らが「極右」に分類されることを拒否している。2010年9月26日放映されたフランス5のテレビ番組でも「私は極右という言葉を好まない。私は極右ではないし、そのような呼称を拒否する」と発言しているように、マリーヌは一貫して「極右」という呼称を拒絶してきた [Simon 2011 : 42, Fourest et Venner 2011 : 239, Igounet 2014 : 397]⁽¹⁹⁾。

「脱悪魔化」による「脱極右化」という課題にとっての最大の課題は、前言したように反ユダヤ主義や歴史修正主義の言動を根絶することであった。

そのような言動は極右政党のイメージに直結し、世論においても激しい非難を巻き起こす危険性があったからである。現に、ルペンを含めて、古参幹部や急進的党员から、その種の逸脱した言動が相次いでいる。

有名な失言は、党首ルペンによる「ガス室」発言であった。1987年9月13日、テレビ番組に出演したルペンは、「ガス室は存在しなかったとは言わない。特別にその問題を勉強したこともない。だが、私は、それが第二次大戦の歴史において些細なことであると信じている」と発言した。その発言の反響はすさまじく、非難の嵐が巻き起こり、党员のなかにも戸惑いや怒りが渦巻いた[Igounet 2014: 187-188]。ルペンの逸脱発言は極右イメージへとFNを連れ戻し、「脱悪魔化」の努力に大きなダメージを与えた⁽²⁰⁾。

マリーヌは、FNから反ユダヤ主義や歴史修正主義のイメージを一掃することに努め、ルペンとは異なっていることを強調してきた。2011年2月3日発行の『ポワン』誌とのインタビューで、マリーヌは「強制収容所で生起したこと、それがどのような条件下が起きたかということは誰でも知っている。そこで発生したことは最高に野蛮なことであった」と明言している[Rosso 2011: 221]。

また、FN内の逸脱した言動についてもマリーヌは厳しい姿勢で臨んでいる。その例が、2011年3月25日に報道された地方議員の言動をめぐるスキャンダルであった。ローヌ・アルプ地域圏議會の20歳の若き議員A・ガブリアック(Alexandre Gabriac)が、ナチスの旗を背景に左手をあげてナチス式敬礼をしている画像がインターネット上に流れ、たちまち激しい批判を招いた。マリーヌは党本部の「紛争委員会」に解決を委ねたが、同委員会は穏便な処分(=戒告)で済まそうとした。そのことを知るや、マリーヌは党首の権限でガブリアックを党から除名することを決断した[Machurete 2012: 136-137, Ivadi 2012: 97]⁽²¹⁾。

その結果、「マリーヌのFN」では、伝統的な極右のテーマへの言及は影を潜め、歴史的文脈や国際状況に適応し、世代交代に配慮した表現や言説に変えられている[Igounet 2014: 448]⁽²²⁾。

そして、「普通の政党」へ

マリーヌが取り組んできた言説とイメージの脱極右化、穏健化の究極目標は、政権参加が可能な「普通の政党」と見做されることである[Goodlife 2015: 123]。つまり、異議申し立ての文化に浸ってきた極右政党から脱皮して、政党システムの一員として安心感と信頼性を有権者に与えること、その結果、政権をめぐる議会制民主主義のゲームに参加する「普通の政党」になることが追求されている[Ivaldi 2012: 96, Igounet 2014: 421]。

そのためには、党に信頼性を与えること、尊重される存在(réspectabilité)になることが必要であり、マリーヌはそのことに大きな配慮を払ってきた。その配慮こそが、既述した「脱悪魔化」の努力であるが、マリーヌはマイナス・イメージを緩和・払拭するだけではなく、プラス・イメージの涵養にも努めた。

例えば、ルペンはスピーチで政治や移民に関する話題を好んだが、マリーヌの場合は、それだけではなく経済に関する言及も多い。そこには移民問題をテコに現行の政治に異議を申し立てるというルペンの反体制的スタイルでは、FNに信頼性を付与するためには限界があること、批判だけではなく政権担当能力をアピールすることが重要であること。そのためには、とりわけ、経済分野で信頼性を勝ち取ることを、マリーヌは重視していた。

マリーヌは高級官僚や知識人、専門家の協力を得ながらマクロ経済や通貨政策に関する知識を身につけていった。自由貿易や保護主義、通貨、税制について熱心に学び、「プロフェッショナル化」していった[Rosso 2011: 151]。ルペンのような扇動的演説や大言壮語だけではなく実務能力もあることをアピールした。マリーヌが「ルペン世代」の有能な青年を幹部に登用し、党外の専門家や知識人のネットワーク形成を重視しているのも、党への信頼性の醸成、実務能力の証明するためと理解できる。

2012年に実施された調査では、31%がFNは「政権担当能力がある」と答え、「デモクラシーにとって危険でない」といった評価が39%に達している。その数字には「普通の政党化」戦略の限界も読み取れるが、FNに対する有権者のFNに対する評価が改善されつつあることも確かであり、マリーヌの「脱悪魔化」戦略の効果を認めるべきであろう。

(4) アウトサイダーからインサイダーへ—FNの適応戦略

共和制との和解—体制的価値の受容と利用

ルベンの時代は、党のポスターにも「アウトサイダー」という言葉を使い、体制の外側で闘う政党であることをアピールしていた。現在、マリーヌは柔軟路線によってFNを体制の「インサイダー」にしようとしている。そこに「マリーヌのFN」が「新しさ」の印象を醸し出している理由がある。

FNが体制的価値を受容していることの象徴が共和制の受容であり、その中心的価値であるライシテ（世俗主義・政教分離）の擁護である。2011年1月の党首への就任以来、マリーヌはライシテの堅持を繰り返し唱えている⁽²³⁾。

フランスの極右はこれまでフランス革命に淵源する共和制やライシテを拒絶してきた。だが、マリーヌと側近たちは、共和制とその価値を拒絶することはFNをマージナルな勢力に閉じ込めてしまうことを認識していた。体制的価値を受容することでFNは有権者の忌避感・拒絶感を緩和すると同時に、共和主義の普遍的価値の名において西欧文明の守護者として自己を提示し、イスラムの異質性や同化不可能性を攻撃する武器になった [Crépon 2016 : 32]。

そのような方向転換は2007年の大統領選挙で鮮明になった。マリーヌは、選挙キャンペーンのなかで共和制や共和主義的価値を受容することを躊躇しなかった。同時に、共和制を担う公務員や公共サービス、左右の政治勢力を統合する共和制の能力など、共和制の長所をほめ称えた [Perrineau 2012 : 158]。

ただし、マリーヌが共和制的価値を擁護するのは、独特の論法に拠っている。それは人権や自由の名においてではなく、フランスの伝統的価値を守る観点からである。「フランス人であることは、フランスの伝統を尊重すること」であり、フランスのキリスト教的伝統の延長線上にあるものとして共和制をマリーヌは擁護している [Fouret et Venner 2011 : 240]。

フランス革命と共和制の価値との和解は、具体的な政治的实践を通じて可視化されている。それは、2007年の大統領選挙のキャンペーンを通じて演出されている。2006年9月20日、フランス革命と共和制にとって象徴的な地であるヴァルミー (Valmy) から大統領選挙のキャンペーンは開始された。革

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

命軍がフランスの貴族と同盟したプロシア軍の攻勢を食い止めた地で、ルペンは、「不可分の共和国」の理念を掲げて革命軍が奮闘したヴァルミーの闘いを再現することを訴えた [Simon 2011 : 20]。

ライシテの妥協なき防衛、イスラムの「共同体主義」の拒絶、犯罪との容赦なき戦争、フランスに対する誇りの復活が現代の闘いであり、それこそが国家と共和制を守り、絶望と死滅の道から国民を救済する残された希望である、とマリーヌは訴えている [Marine Le Pen 2006 : 319-320]。

さて、共和制との和解は、FNのメインストリーム化の戦略の一環であった。それは、FNから共和主義や民主主義、自由、人権といった近代的価値と相容れない「急進的で反動的な政治勢力」というイメージを払拭して、有権者に受容される政党へと転換させること、つまり、支配的な政治文化を敵視する立場を修正することで周辺的位置から脱却するという目的があった。他方で、共和制との和解によって、政党システムの中心に居場所をつくること、FNをメインストリーム化することが追求されている [Perrineau 2014 : 140]⁽²⁴⁾。

共和制とイスラムの対置－反イスラムの旗手として

大量の移民・難民の流入は、雇用や社会保障など国民の利益を侵害するとFNは攻撃してきた。先述のように、1970－1980年代と同様に、現在まで移民問題は重要な政治的争点でありつづけている。ムスリム系移民を取り巻く環境は世論の動向も含めて、新世紀に入って厳しさを増している⁽²⁵⁾。

9・11事件以降、イスラム原理主義の台頭と「イスラム嫌い (islamophobes)」の拡大という国際的文脈の下で、国民においてもイスラムに対する不安と反感は高まっている⁽²⁶⁾。そのような状況の中で、FNの攻撃はイスラム系移民へと重点を移していった。イスラム勢力は、市民生活を脅かすと同時に、ナショナル・アイデンティティに脅威を与える存在として、FNは攻勢を強めている⁽²⁷⁾。

2007年大統領選挙でFNは「共同体主義の拒絶と世俗主義原則の擁護」を掲げてイスラム批判を展開し、2012年の大統領選挙では「フランスのイスラム化」への反対を掲げて、麻薬とエイズなどの伝染病の増加、治安の悪化、

フランス社会の解体といった弊害の責任をイスラムに転嫁している。また、ブルカの着用、一夫多妻制、路上での集団礼拝、学校給食での豚肉の拒否といったことが日常生活での「共同体主義」の事例としてあげられている [Ivaldi 2012 : 100]。

2010年の地域圏議会選挙から、FNのプロパガンダはイスラム主義のテーマに集中していく。同選挙に向けてFNは「イスラム化にノン」と大書したポスターを作製したが、眼の部分以外は全身を黒いブルカで包んだ女性の横に、アルジェリアの国旗で覆われたフランスの国土にミサイルの形をした7つのモスクが建っている図柄が添えられていた。そのポスターでは、イスラムが同化の意思がないことが表現されていた [Igounet 2014 : 419]。

そして、マリーヌは、共和制との和解を超えて、その守護者としてのポジティブなイメージをFNに与えようとしている。それは、共和制とは異質な宗教であるイスラムとの闘いと接合することによって追求され、イスラム原理主義への不安を最大限に利用するものである [Delwit 2012 : 100]。イスラム拒否の論理は、移民という同化不可能で異質な存在を拒否するロジック延長線上であった。受け入れ社会に個人として統合されることなく、自分たちのエスニックな共同体に閉じこもり、集団的なアイデンティティに固執するイスラム教徒に対してFNは、「共同体主義（コミュニタリズム）」という非難を投げかけてきた [Lecœur 2007 : 102-103]⁽²⁸⁾。

イスラムの同化不可能性と「共同体主義」を象徴する行為として、マリーヌは路上礼拝の例を挙げている。フランスではモスクの不足から20か所で通りがブロックされて礼拝が行われているが、マリーヌはドイツによる国土の占領を引き合いに出して街頭での集団礼拝も「占領」であると決めつけている [Machuret 2012 : 124-125]。2010年12月10日、マリーヌはリヨンで開催された集会での演説でヴェールやブルカの着用が増えていることに触れた後に、定期的に数百人が公道を占拠して礼拝していることを問題にした。装甲車や兵士こそいないが、ナチスによる国土の不法な「占領」に匹敵するものとして問題視している [Fourest et Venner 2011 : 275-282]⁽²⁹⁾。

結局、FNによるイスラムの拒絶は、20世紀後半の極右を特徴づけている外国人嫌いや人種主義に立脚したものではなかった。それは、一方では、フ

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

フランスの文化的アイデンティティを守る欲求に、他方では、ヨーロッパへのイスラムの戒律やジハード（聖戦）思想の侵入への強い拒絶に立脚している [Taguieff 2016 : 26]⁽³⁰⁾。

イスラムへの厳しい世論を背景に、マリーヌはライシテを始めとした西欧的価値と文明の防衛者として振舞っている。「フランスのイスラム化を回避するために、極めて断固とした方法で、世俗主義（ライシテ）は再確立されるべき」と、マリーヌは発言している [Corbière 2012 : 38]⁽³¹⁾。マリーヌにとって世俗主義は、共和制との和解だけでなく、イスラムと闘う有効な武器でもあった。

その論法はデモクラシーと西欧的価値全般へと拡大されている。FNは西欧文明を構成する価値観や制度を受容しない「異質性」を批判するという手法をとっている⁽³¹⁾。例えば民主主義である。その価値と制度を擁護することで、民主主義と相いれない思想や宗教としてイスラムに攻撃を加えている。イスラムは西欧民主主義の制度的多元主義を利用して自分たちの価値規範、イスラム法を社会に強制する全体主義イデオロギーであることを告発し、そのような脅威に対して、意見表明の自由、寛容、ライシテ（世俗主義）、男女平等、マイノリティの尊重をといった民主主義の価値・制度を防衛する側に位置づけている [Taguieff 2006 : 25-6, Goodlife 2015 : 124-125]⁽³²⁾。

マリーヌはFNこそが「フランス共和制とその偉大な原理を防衛できる唯一の本物の運動」と言明している [Goodlife 2015 : 124]。FNは反イスラムの旗手として共和制とキリスト教文明を擁護する役割を果たそうとしている。

イスラム系移民の増加と「9・11事件」、そして、マドリッド（2004年3月）、ロンドン（2005年7月）などでのテロ事件は、イスラムへの社会の視線を厳しいものにした。そのような社会の雰囲気背景としたイスラムへの敵意と危機感を、マリーヌは巧妙に異質な文化と文明の対立という次元に誘導していった。FNの躍進を支えた成功の方程式であった反移民の論理は、2000年代には反イスラムのそれへと組み替えられている。そして、反イスラムの論理は、共和制（とその中心的価値である政教分離）と自由、民主主義、性的マイノリティの権利や男女平等といった人権、つまり、フランスの共和主義モデルやヨーロッパ文明の成果を防衛するという言説と接続され

ている (Perrineau 2014 : 97-98)。

モダンな右翼へー伝統的家族・女性観からの脱却へ

2011年5月1日のジャンヌ・ダルク祭で、マリーヌは「男性と女性、ヘテロセクシュエルとホモセクシュエル、キリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒、無宗教者の違いにかかわらず、まずはフランス人である」と宣言している。この発言は「ルペンのFN」からの転換、新しい世代が指揮権を掌握したことを象徴的に表現していた [Crépon 2012 : 241]。

伝統的家族や白人でキリスト教の社会を自明視してきたFNにとって、宗教や性別の多様性を肯定する言説は「新しさ」を感じさせるものであった。マリーヌは古色蒼然たる極右イメージを脱却するために、モダンな政党であることも演出してきたが、その典型がフェミニズムに接近するような言説であった⁽³³⁾。それを象徴するのが、女性の権利をめぐる問題、特に、妊娠中絶をめぐるマリーヌの言説であった。父親のルペンは、PACS（民事連帯契約法）や妊娠中絶法（「ヴェューユ法」）の廃止を唱えていたが、マリーヌ自身は事実婚を選択し、妊娠中絶に対しても理解を示している [Ivaldi 2012 : 104]。

ただ、マリーヌは中絶に対して容認的姿勢を示しているが、一方で、中絶費用の償還制度の廃止や出産の奨励（出産に関する情報提供、家族への財政支援、養子縁組制度の充実）も求めている [Dewit 2012 : 34]。マリーヌは出産が選択できる条件を整備することで、妊娠中絶を選択しないことを促そうとしている [Fourest 2011 : 381-382]。

マリーヌは著書の中で、現実には中絶しない自由はないと主張している。良心の呵責もなく避妊や妊娠中絶、中絶費用の償還に頼る女性は存在するが、多くの女性は妊娠中絶に追い込まれている。そのような現実を放置して、ヴェューユ法を廃止して出産を強制することは冷酷で有効でない。女性たちは失業のリスクや不安定雇用、低家賃住宅の入居難への不安から妊娠中絶を余儀なくされている。ゆえに、自分の子供にきちんとした将来を保証することで妊娠中絶を選択しない条件を女性に与えるべきである。そのように考えるマリーヌは、妊娠中絶を余儀なくされている現実に向き合ってこなかった政治を非難している [Marine Le Pen 2006 : 192-194]。

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

家族政策の面でも、「マリーヌのFN」は変化を見せている。1990年代に発表されたFNのプログラムでは「フルタイムで子供の教育に献身する母親という選択」が前提にされていたが、2012年のプログラムでは、両親手当の導入が「母親もしくは父親が職業生活と子供の教育を自由に選択することを可能にする」と説いている。性別役割分業に立脚した極右の伝統的家族観・女性観からすると、その点でも大きな変化を示していた[Crépon 2012: 246]。

同様に、ホモセクシュエルについても、マリーヌは寛容な姿勢を示している⁽³⁴⁾。キリスト教右派の影響力が強いFNは、これまでホモセクシュエルを敵視してきた。例えば、1984年にルペンは出演したテレビ番組のなかで、ホモセクシュエルについて、それが「犯罪」とは思わないが明らかに「生物学的・社会的に異常」であると述べている[Igounet 2014: 147]。

結局、マリーヌと同世代の若い活動家は、女性が働き、避妊や妊娠中絶の権利をもつことを既得権として自明視している。この領域でのFNの変化は、フランス国民全般に進行する意識の変化と、FNの活動家と党员での意識変化を反映したものと言える。マリーヌは1968年生まれであり、「5月革命」を潜り抜けることで、フランス社会は急速にリベラル化していった。マリーヌも、1990年代に特に強くなる反権威主義的イデオロギーが拡大する時代を経験している。マリーヌと父親ルペンの柔軟性と寛容性に対する姿勢の相違は、世代的な経験と感性の違いで説明できる⁽³⁵⁾。

事実婚を選択し、3人の子供を育てながら党首職をこなし、社会の多様性を承認するマリーヌの姿は、古色蒼然たる極右政党のイメージを緩和し、モダンな印象をFNに与えることに寄与している。

(5) FNの変化と連続性－「節度あるオルタナティブ」へ

「節度あるオルタナティブ」としてのFN－「政権担当可能な政党」へ

さて、マリーヌのもとでFNのイメージは変わってきた。「脱悪魔化」戦略によって極右イメージを緩和し、体制的価値の受容することで脱「アウトサイダー化」を図ってきた。政権にアクセスするには支持者の拡大が急務であったが、そのためには、政党システムのなかでの位置取りを大きく転換する必要があった。

水島治郎は著書のなかでイギリスのブリテン民族党とイギリス独立党を比較して、「節度あるオルタナティブ」という言葉を使っている。ナチズム的姿勢や暴力的な急進性によって有権者から違和感をもたれていたブリテン民族党に代わって、イギリス独立党が「節度あるオルタナティブ」の選択肢を提供したことが同党に成功をもたらした〔水島 2016：170-171〕。そのことは「マリーヌのFN」の成功にも当てはまる。

「ルベンのFN」は決して「節度あるオルタナティブ」ではなかった。反ユダヤ主義や歴史修正主義的発言によって輦轡を買ってきたFNは、多くの有権者にとって選挙で投票する対象ではなかった。その政策理念や言説の一部に共鳴したとしても、急進的で強硬な言説や行動スタイルは多くの有権者に不安と嫌悪を与えて投票を忌避させてきた。

1990年代にメグレたちは、「脱悪魔化」や政策理念と言説の穏健化・婉曲化によって支持の拡大に乗りだした。だが、既述のように、メグレの党改革は分裂によって挫折し、それを引き継いだのがマリーヌであった。

異議申し立てのポピュリズムがFNの魅力であることは確かである。現在でも、FNは反移民・難民や反グローバリズム・反EUのテーマを中心に論陣を張り、国内やEUのエリートに激しい攻撃を加えている。その点ではFNには強い連続性が見られる。だが、マリーヌのもとで、いわば、「節度あるポピュリズム政党」の方向に軌道修正が施されている。忌避政党を脱するだけでなく、有権者が安心して選択できる政党として認知されよう、すなわち、まともな政策もなく、批判的言説を駆使するだけの政党ではなく、既成政党へのオルタナティブとして有権者に認知され、選択の対象になること、そのためには、政権担当可能な政党に相応しい言動や政策、理念を備えた政党として有権者から評価される必要があった⁽³⁶⁾。

マリーヌは、そのような課題を自覚していた。マリーヌが党内外のアドバイザーのネットワークを充実し、多様な専門家や官僚、知識人の結集を図っているのは、現実的で信頼されるオルタナティブ、すなわち、統治能力のある政党、既成政党に代わるオルタナティブに相応しい理念や政策を備えるためであった。そのためには、FNを「普通の政党化」する必要があった〔Liszakai 2011：95, Ivaldi 2012：97, Marine Le Pen 2006：248〕。

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

特に、最大の弱点であった経済領域で信頼できる政策を提示することが重要であった。2010年12月10日、フランス2の番組でマリーヌは経済政策について重点的に触れ、ユーロからの脱退と関税の復活について語った。同番組は330万人が視聴し、番組史上4番目の高い視聴率を記録した。経済政策について誰がマリーヌにアドバイスをしているかは明らかでないが、マリーヌの側近の一人は「国家と企業のすべてのレベルに対してFNは専門家を擁している」と豪語している [Liszakai 2011 : 162-163]。

2011年4月8日、新経済プログラムの基本方針を説明するために記者会見を設定され、経済学の教授であるJ-R・シュルゼ (Jean-Richard Sulzer) がFNの改革案を説明した。シュルゼの税制改革にはトマ・ピケティの影響も見られ、所得税とCSGを一つの累進税に統合することが提案されていた。その他に、賃金の物価スライド制の導入も掲げられていた [Fourest et Venner 2011 : 172-173]。

2010年に設立されたシンクタンク「理念・国民」が2011年6月に活動を開始し、1980年代に設立された「科学評議会 (conseil scientifique)」とともに、政策提言の信頼性を高めるために専門家の知見を集めることを目的としていた [Dézé 2012 : 144-147]。

異議申し立てや批判だけではなく、科学的で専門的な知見に基づいた政策の提示や議論ができる政党として評価されることが追求され、「節度あるオルタナティブ」として、より多くの有権者を結集できる政党に脱皮することが目指されている。

「区別化戦略」と「適応戦略」－FNの二つの顔

マリーヌのもとで「普通の政党化」を進めるFNにとって、それは決して容易な課題ではない。容易でないというのは、党内で極右的思想と体質をもつ勢力が残存しているからだけではない⁽³⁷⁾。「普通の政党化」が政党システムにおけるFNの基本戦略と存在意義に関わっているからである。

FNは急進的な極右政党から出発し、選挙での躍進によって周辺的な政党から脱却してきた。そのためには、固有の支持層を超えて支持を拡大してきたが、それを可能にしたのが政党システムに適応する戦略の成果であった。

1986年の国民議会選挙における党外候補の擁立（「国民連合」リスト）、1990年代におけるメグレ派による党のイメージ転換と、FNは危険で暴力的な極右政党から脱却する努力を払ってきた。有権者と保守政党の敵意や忌避感を払拭し、FNへの投票や選挙協力を可能にすることが意図されていた（「適応戦略」）。

だが、そのような戦略の展開が期待された成果をもたらしたわけではなかった。1994年に実施された世論調査によると、「FNはデモクラシーにとって危険」という回答は1991年の65%から73%へと上昇し、固定的支持層を超えて広く得票する可能性は閉ざされていた。同調査では他にも、FNは「セクト的」政党であるという回答は78%から85%に、「FNは統治できない」という回答は76%から86%に増加している [Dézé 2012 : 113]。メグレたちの努力にもかかわらず、FNは「普通の政党」へのイメージ転換に失敗している。

そのような状況を打破すべく、マリーヌのもとでの「適応戦略」は、共和制や民主主義、ライシテといった体制的価値を受容し、西欧の文明を擁護する役割をアピールするまでに「進化」している。共和制や民主主義にとって危険ではない存在として有権者に認知されることで、支持を拡大するという戦略が展開されている。

一方で、「適応戦略」と並行してFNはこれまで「区別化戦略」も駆使してきた。繰り返されるルベンの失言に象徴されるように、反ユダヤ主義や歴史修正主義を疑われるような言動が党内で見られたが、そのような言動がメディアで報道され、FNは非難を浴びせられるというパターンが繰り返された。それは、党内の極右の勢力への配慮であると同時に、FNが他の政党と違うことを示すために独自性を顕示することが意図されていた⁽³⁸⁾。

急進的政党が支持拡大に乗り出すとき、言動の穏健化や婉曲化、党イメージのソフト化によって（適応戦略）、党への忌避感・拒絶感を緩和しようとするのは普遍的に見られる現象である。ただ、急進的政党の変身にはジレンマが付きまとう。

「適応戦略」によって「普通の政党化」を進めると支持者の拡大や他党との連携の可能性は高まるが、一方で、党のアイデンティティの希薄化・曖昧

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

化が進み、他党との区別が不鮮明になると同時に、党の伝統や独自性に執着する勢力が不満を高めることになる。他方で、「区別化戦略」で独自性を誇示すると、党の伝統やアイデンティティに固執する党員や支持者にはアピールできるが、一般の有権者では拒絶感や忌避感は高まる。どちらの戦略に傾斜してもジレンマを抱えることになる。

FNに関して言えば、「適応戦略」によって、一方では、極右政党の狭い基盤を超えて支持を拡大し、保守政党との連携の可能性は高まる。だが、他方で、党のアイデンティティをめぐるカトリック伝統主義派や極右派との確執が強まると同時に、政党システムで埋没してしまう危険性もある。

独自性を保ちながら「普通の政党化」を推進することは非常に難しい作業である。1990年代からそのような難題に取り組んできたFNは、マリーヌのもとで「脱悪魔化」に拍車をかけ、FNイメージの刷新を図っている（「適応戦略」）。その結果、FNへの警戒感や忌避感は緩和され、確かに支持者の拡大に成功している。だが、「適応戦略」を進めると党内反対派の不満が強まるだけでなく、イタリア社会運動のように保守政党との区別化が難しくなるというリスクもある。「適応戦略」をベースとしながら「区別化戦略」で独自性を演出する手法は、基本的にマリーヌのもとでも取られている。

その意味で、マリーヌの言説もFNの二つの顔を象徴している。ホモセクシュエルの人権や人工妊娠中絶に理解を示す穏健でモダンな新しい顔と、FNの伝統的価値や主張を継承する古い顔が併存している⁽³⁹⁾。

「ルペンのFN」との連続性と「新しさ」

最後に、「マリーヌのFN」は変わったかという問いに改めて答えておこう。結論を言えば、イデオロギーや政策の面で言えば「マリーヌのFN」は「ルペンのFN」（正確には「メグレのFN」）と基本的には異なっていない。その面では、2つのFNは強い連続性を示している。マリーヌは、メグレたちの優先したテーマを継承してプログラムの基礎にしている [Igounet 2014 : 254]。

イデオロギーや政策だけでなく、政治戦略の面でも「メグレのFN」との連続性は顕著である。マリーヌが党イメージの改善のために力を入れてきた

「脱悪魔化」戦略であるが、メディアの活用、言説の婉曲化、知識人の活用、党の外側への開放といったメージ戦略は独創的なものではない。1980年代からメグレたちによって推進されてきた、党に信頼性を与え、「普通の政党」と認知されるための戦略を基本的に踏襲している [Dézé 2012 : 149]。その意味で、「マリーヌの FN」は「メグレの FN」の発展形であると言えよう⁽⁴⁰⁾。

それでは、マリーヌの FN の「新しさ」はどこにあるのだろうか。結論的に言えば、「脱悪魔化」・「普通の政党化」という「適応戦略」を展開することで、「マリーヌの FN」は新しいイメージを振りまいているところにある [Igounet 2014 : 374]。

先に「適応戦略」と「区別化戦略」の使い分けについて触れたが、極右に由来するナショナリズムとポピュリズム的手法との結合が、FN の「区別化戦略」を可能にしてきた。反移民・難民、反グローバリズム・EU、反エリートといった立場は、現行秩序への対抗運動、体制のアウトサイダーとしての相貌を FN に与えてきた。ナショナリズムをイデオロギーの基調にしたポピュリスト政党である FN は、現行の経済社会秩序を擁護する既成政党との区別化に成功してきた。

「マリーヌの FN」は、これまで通り移民を主要な攻撃的にして「反エスタブリッシュメントの政党」として「細民 (petits)」と「お偉方 (gros)」を対置する「異議申し立てのポピュリズム」と、グローバル化のもとで国民のアイデンティティが脅かされていると感じている民衆に訴える「アイデンティティのポピュリズム」を活用しながら、経済危機やグローバル化による経済・社会的困難に苦しむ民衆に寄り添う「護民官」政党＝「民衆救済の政党」のイメージを前面に立てている [Taguieff 2012]。

一方で、党イメージの改善に向けてマリーヌが広告塔として前面立つと同時に、世俗主義、フランス革命、国民国家、愛国主義といった共和主義的価値と民主主義や人権、自由といった西欧的価値を受容することで、グローバリズムと欧州統合に抗して国家主権と国民的利益を防衛し、イスラムの「侵略」に対抗する政党として自己を提示している。その「新しい顔」を巧みに演出している点に「マリーヌの FN」の独自性がある。

本質的にはルペン時代の FN を継承しながらも、女性党首マリーヌのもと

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

で「新しさ」を演出している⁽⁴¹⁾。それが効果を発揮して支持の拡大に成功しているのは確かである。そして、もう一点指摘しておけば、本質的に「変わっていないFN」が大きく支持を伸ばしているのは、「新しいFN」のイメージが少なからぬ有権者を魅了しているからであるが、それだけではFNの躍進は説明できない。「変わらないFN」が成功を博しているのは、フランスの経済社会と政治の方が大きく変化してきたからである。

つまり、FNは反移民・難民、反イスラム、反グローバルズム・EU、反エリート・既成政党のテーマを掲げて一貫した論陣を張ってきたが、そのようなテーマを取り巻く環境と世論の動向が大きく変化し、FNの主張に追い風が吹いてきたのである。その意味で、ブレないFNに時代が追い付いてきたと言える。例えば、FNは以前から脱EU・ユーロを主張してきたが、今日ではフランス政治のアジェンダに乗せられ論争の焦点になっている[Delwit 2012: 35]。次章では、FNとグローバル化について詳しく見てみることにしよう。

注

- (1) 「マリーヌのFN」が多くの点で「ルペンのFN」を踏襲していることは、ルペン自身も認めている。政策プログラムに関して顕著な変化は存在しないし、状況の変化に適應していくつかの側面を強調しているだけであると、ルペンは述べている[Machuret 2012: 127]。
- (2) 1980年代には移民問題がフランス政治で争点化するが、他党との競合の中でFNは急進的な言説を展開していた。既成政党や教会、人権団体の非難を受けながら、FNは移民の受け入れ停止、船舶と航空機による不法移民の追放、反人種差別法の廃止、1974年以降に認められた帰化の再審査、クラスごとの移民系生徒の割当制による学校教育の「脱コスモポリタン化」といった要求が並べられていた[Dézé 2012: 111]。
- (3) 2012年の大統領選挙と国民議会選挙はFNの復活を証明したが、その原動力はやはり移民問題であった。移民とその統合の問題は選挙の中心的争点へと浮上し、他の経済社会問題をめぐる論争にも影響を与えた。例えば、EUに関する論争はEU内での国境を越えたヒトの自由移動を規定したシェンゲン協定やEUの境界管理の厳格化に及び、選挙制度改革をめぐる論争は移民の参政権をめぐる議論に発展した。同様に、社会保障についての議論は非法移民の福祉へのアクセスや家族合流の是非へと向かい、警察・司法制度改革と治安や都市郊外の状況、テロの脅威といったテーマは、共和主義的統合

モデルの有効性についての論争に火をつけた [Chebel d'Appollonia 2015 : 181]。

- (4) 2007年11月17-18日に開催されたボルドー大会の閉会演説で、ルペンはFNの3つの処方箋として移民ゼロ、犯罪ゼロ、自国民優先をあげている。移民流入との闘いが優先的のスローガンであり、それは家族呼び寄せ政策の転換、二重国籍の廃止、非法法移民の即時追放、経済移民の全面的停止、モスク建設計画の即時停止を通じて実現できると、これまでと同じ主張を展開している [Igounet 2014 : 410]。
- (5) 2015年の地域圏議会選挙第1回投票では、FN投票者の91%は「移民が多すぎる」と考えている（有権者全体では69%）。移民が過剰という考えに反対の有権者では1%しかFNに投票していないが、賛成する有権者では52%がFNに投票している [Mayer 2016 : 12]。2017年大統領選挙での投票動機を見ると、マリヌへの投票者では「移民」（69%）、「治安」（42%）が他候補への投票者に比べて群を抜いて多く、FNが支持される理由は一貫している [Le Gall 2017 : 6-8]。
- (6) マリヌは、メグレ時代に考案された「自国民優先」の主張も踏襲している。移民に福祉資源を分配する現行のシステムは持続可能でないことを指摘している。すなわち、移民に住宅、医療、教育を施し、刑務所への財政負担、電気代やヴァカンス費用、給食費、学校の新学期費用、家族手当、一人親手当、子供手当といった様々な費用が負担されているが、そのような状況は継続不可能であると説かれている [Marine Le Pen 2006 : 299]。
- そこには、包摂されるべき正規のメンバーシップと排除されるべき非正規のメンバーシップとの区別という論理が働いている。つまり、フランスのアイデンティティを共有しないメンバーを共同体から排除する発想がそこには読み取れる [Rosso 2011 : 263]。
- (7) FNは、治安問題への処方箋として秩序と権威が支配する社会を一貫して説いてきた。つまり、「寛容ゼロ」の路線に立ち具体的な対策—司法予算の25%増額、禁固1年以上の刑罰を受けた犯罪者に対する社会的扶助や給付の打ち切り、サルコジ政権下で毎年3千名削減されてきた警官と憲兵の増員と新たな刑務所の建設を要求している [Ivaldi 2012 : 99-100]。
- (8) マリヌは、そのような趣旨の発言を、2013年5月28日に受けたインタビューでも述べている [Igounet 2014 : 437]。
- (9) その結果、労働者での支持が拡大していることは既に紹介したが、党員でも労働者の割合は増加している。1973年には3%であった労働者の党員は、2016年には約三分の一にまで増加している [Igounet 2016 : 39]。FNの「社会的右翼」の演出は、投票者と党員の両面で着実に効果を発揮している。
- (10) 1992年にFNは、貧困との闘い、労働価値の再評価、失業の抑制、家族の優遇、社会的再配分を掲げた社会プログラムを発表した。それまでの新自由主義に立脚する経済社会的立場を大きく転換して、「社会的保護主義」の立場を鮮明にする。1990年代中葉には、「社会的なもの、それはFN」というスローガンを発して「社会的右翼」であることをアピールしている [Dézé 2012 : 150-151]。
- (11) マリヌは、「個人主義の名においてあらゆるマイノリティの擁護者となることで国

民の防衛を放棄している」と既成左翼を非難している。戦前の社会党指導者 J・ジョレス (Jean Jaurès) の時代には左翼は国民的ビジョンをもっていたが、国民に属し、歴史と未来を担うという感覚とともにそれを喪失してしまった。マリーヌによると、J-L・メランション (Jean-Luc Mélançon) が成功を収めているのは、そのような左翼と国民の断絶を彼らが理解しているからである [Corbière 2012: 97-98]。

確かに、社会党の支持層の比重は新中間層に傾き、それは社会党の政治的方向性にも影響を与えてきた。1997年に成立するジョスパン政権は歴代政権で最も民営化を推進したことが象徴しているように、経済面では現状を前提にした政策しか遂行できなかった。それと対照的に性的マイノリティにも異性カップルと同等の権利を保障する「民事連帯契約」や男女の候補者数の同等を目指す「パリテ法」、高速増殖炉スーパー・フェニックスの廃炉など緑の党と社会運動の望むいくつかの政策は実現に漕ぎつづけている [畑山 2012: 169-170]。先進社会であるフランスでも個人の自由や人権、環境など文化的リベラリズムの価値が浸透しているが、そのような価値観をもった、比較的に高学歴で豊かな生活を享受する社会層が社会党の支持層でも増大していった。政権政党化という変化もあるが、そのような支持層の変化も社会党の政治的方向性に影響を与えていた。他方で、民衆層の比重が低下することで、彼らの望む政策 (雇用対策、社会保障の充実、購買力の引き上げなど) は相対的に顧みられなくなっている。

- (12) そのような主張は、「新右翼」の知識人たちによって定式化された「自国民優先」の内容を継承していた。2012年の大統領選挙では、「自国民優先 (priorité nationale)」と語彙が変更されているが、同一の能力ならばフランス人を優先して雇用すること、社会住宅に関しても同じような条件ならフランス人の入居を優先すること、社会給付に関して、一方の親がフランス人か EU の加盟国民の場合は優先的に給付することなどが説かれていた。ただ、人種差別」といった非難を回避するために「同一の能力ならば」といった前提をつけるとか、「それは教条的テーマではなく、財政的なものである。社会的扶助はまず国民に配分される。その福利が国民に確保されたら、可能であれば国民以外にも提供される」と実際の理由を挙げるなどの配慮も払っている [Rosso 2011: 263]。だが、実際は移民の不利益な扱いを肯定していた [Crépon 2012: 222]。

- (13) 例えば、ヘナン＝ボーモン在住の50歳代半ばの商人は、多くのフランス人がやっと医療を受けているときに、非正規滞在の外国人たちは「国家医療援助 (AME)」によって医療を提供されていることに憤っている。元共産党員の建設労働者は、世界の悲惨な人々をフランスに受け入れることは不可能で、貧困な国々を支援することには反対しないが、フランス人を優先的に支援すべきと述べている。鉄道員の息子で歴史学専攻の学生は、子沢山の移民が優先されて、知り合いが低家賃社会住宅に入居できなかったことを憤っている [Crépon 2012: 225]。

- (14) マリーヌは、ゴルニッシュと違って広範な国民を結集することを訴えている。「ゴルニッシュは極右を結集し、FN から離反した、もしくは、FN の周辺にいる集団や政党を集める願望を何度も表明している。私はもっと大きな希望を抱いている。すべてのフランス人を結集することである」 (Rosso 2011: 87-88) と、マリーヌは新しい支持層に

ウイングを伸ばす必要性を説いている。

- (15) マリーヌ人気は彼女の親しみやすいイメージが大きな役割を果たしている。多くのフランス人から「マリーヌ」と呼ばれることは他のFN幹部では考えられないことであり、マリーヌの名はルペンを恐れる人々に「異化効果」を発揮した [Simon 2011 : 21]。
- (16) 「マリーヌのFN」の「新しさ」は、新党首の就任も含めて党指導部の構成にも表現されていた。すなわち、世代交代によって党指導部が若返り、その点でも「新しさ」が印象付けられたことである。2014年の時点での執行委員会の構成を見たとき、名誉党首である父親ルペン(86歳)に象徴される極右運動の伝統を背負った古参党員に対して、46歳のマリーヌと伴に、S・ブリオワ(42歳)、L・アリオ(45歳)、F・フィリップ(33歳)といったマリーヌ派の若手幹部が登用されている [Perrineau 2014 : 59]。
- (17) マリーヌが取り組んできたFNの「脱悪魔化」戦略が功を奏して、マリーヌと党のイメージは急速に改善されつつある。2011年3月に『フランス・ソワール』紙が実施した世論調査では、45%が「FNは他の政党と同じ」と考え、59%が「FNは関心のある問題や争点群に取り組んでいる」と回答している。また、「FNはフランスの抱える問題に有効な解決法を提案している」と35%が回答している [Philippot 2011 : 52]。2012年に実施された調査でも、FNが「伝統的価値に愛着をもつ愛国主義的右翼を代表している」という回答は41%に達し(前年比+4%)、「政権担当能力をもっている」という回答31%(+6%)、FNは「デモクラシーにとって危険でない」という回答39%(+2%)と党のイメージの改善が確認できる [Le Monde 13 janvier 2012]。
- (18) マリーヌたちは極右の体質を払拭して、「オランダ自由党」やスイスの「中道民主同盟」に倣って、FNの支持層を拡大することで大衆的政党に脱皮する意志を鮮明にしていた [Mayer 2012 : 143]。
- (19) マリーヌが「極右」という言葉を拒絶していることは前言したが、それではFNをどのような呼び方を望んでいたのだろうか。マリーヌは「民衆政党(un parti populaire)」 「国民的・民衆的右翼 (droite nationale et populaire)」という呼称を好み、「右翼でも左翼でもなく」、共和主義的で世俗的な政党とFNを性格づけている [Fourest et Venner 2011 : 81, Corbière 2012 : 16]。
- (20) ルペンだけでなく、マリーヌと後継レースを争ったB・ゴルニッシュも歴史修正主義的発言を繰り返している。2004年10月11日、当時はFNの全国書記長であったゴルニッシュは、リヨンでの記者会見で「ニュールンベルク裁判の判決に対して全面的に賛成する真摯な歴史家はもはや一人もいない」「ガス室を否定しないが、私はその問題の専門家ではない。歴史家に議論は委ねようと思う。議論すること自体は自由である」といった発言で物議を醸している [Rosso 2011 : 21]。
- (21) マリーヌは反ユダヤ主義の汚名をそぐべく、ユダヤ人との関係の修復にも取り組んできた。例えば、2004年にマリーヌはフランス・イスラエル協会の会長である弁護士のG-W・ゴルナデル (Gilles-William Goldnadel) と会談し、ユダヤ人コミュニティとの関係の改善に乗り出している [Rosso 2011 : 225]。2011年11月、マリーヌはユダヤ人コミュニティの幹部、イスラエルの国連大使と会談するためにアメリカに赴き、同年の12月に

マリヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

はイスラエルも訪問している [Crépon 2012 : 212]。

(22) といっても、マリヌの発言が常に一貫していたわけではない。恐らく、FN内の極右的勢力への配慮からであろうが、時として歴史修正主義への姿勢は曖昧になる。例えば、イスラエルのジャーナリストにヴィシー体制とフランスのファシストによる犯罪を非難するかと聞かれたとき、マリヌはフランスの歴史には「素晴らしい(splendeur)時代」もあるので一部だけ取り出して否定しないといった趣旨の回答をしている(2011年1月8日) [Corbière 2012 : 50-51]。ヴィシー体制やファシズムへの明確な非難と評価は回避されている。

(23) FNは世俗主義を前面に掲げるようになったが、といって、これまでのキリスト教的価値を否定したわけではない。それは、表現の変更に過ぎなかった。「自由、平等、博愛」という国民的標語に含まれる諸原則は、世俗化されたキリスト教の原理にすぎない(マリヌ)のであり [Dézé 2012 : 144]、マリヌは、イスラムからキリスト教の共和国を防衛する立場でライシテを武器として活用しているといえよう。

(24) そこにルペンとの最大の相違点があり(ということはメグレと共通しているということだが)、権力をめぐる思考法の違いがあった。ルペンはFNが体制のアウトサイダーであること、異議申し立て政党であることを基本戦略としてきたが、2002年の大統領選挙で示されたように、異議申し立て政党としてのFNの限界は明らかであった。その限界を乗り越えて前進するためには、FNのイデオロギーや思想の基本は維持しながら、「適応戦略」を駆使して、権力への到達を視野に入れるという発想がマリヌにはあった。そのためには、体制的価値との和解が急務の課題であった。

(25) 9・11事件はイスラム原理主義とテロへの反発と危機感を一気に増幅させたが、フランス社会でもイスラムに対する反発と警戒心が高まっている。その象徴的事例が1996年から1997年の冬に起きた公立中学でのイスラム女生徒によるスカーフ着用をめぐる対立と論争であった。多文化主義とフランスの「イスラム化」をめぐる論争が世論の関心を引くようになった [Simon 2011 : 265]。

(26) 2011年11月にIFOPが実施した調査によれば、76%が「フランスでイスラムが勢力を伸ばしすぎている」と考え、モスク建設に対する国家による資金援助を肯定する回答は14%にすぎない[Crépon 2012 : 106]。同年3月に実施された調査でも(TNS-SOFRES)、「イスラムやムスリムに権利が与えられすぎ」という回答が18-24歳の青年層でも39%に達している [Muxel 2012 : 33]。イスラムへの不安は、「寛容の国」フランスでも広がり、一般的には寛容な価値観をもっていると言われる青年層でも、イスラムについては排外主義的な傾向がみられる。

(27) フランス社会では、イスラムの台頭を脅威と喧伝する傾向とともに、保守と極右政党のなかには、ライシテの名のもとに、フランスのカトリック的アイデンティティを回収して利用しようとする「アイデンティティのライシテ」が見られる。カトリックをフランスの文化や伝統として取り込み、ナショナル・アイデンティティを強化する論理(「カト=ライシテ」として、カトリックをイスラムに対置する構図が描かれている[伊達 2018 : 6, 90]。

- (28) 2011年県会議員選挙でも、FNは「共同体主義の民兵」を攻撃する内容のビラを配布しているが、そこには「フランスの法に挑戦する政治的で要求の多いイスラム」「共和国の法を共同体主義的法に置き換えることを狙っている封建主義者」といった表現が含まれていた [Ivaldi 2012 : 101]。
- (29) マリーヌの「占領」発言には多くの非難が寄せられ、初めての「失言」とみられた。だが、マリーヌは失言とは認めず、「法的・物理的現実の確認に基づく熟慮された分析」とであると反論している [Rosso 2011 : 94-95]。
- (30) 差別と排除の根拠を生物学的な優劣ではなく、文化や伝統の違いに求めた新右翼の「新しい人種主義」を踏襲した主張である(第3章参照)。結局、精神的なもの(spirituel)と世俗的なもの(temporel)の区別、政教分離の基本を認めない限り、ムスリムは共和主義者になれないし、フランス人になることは不可能なのである [Corbière 2012 : 46]。
- (31) 西欧のリベラルな価値(男女平等・女性の権利、政教分離、性的マイノリティの権利)の名においてイスラムとの闘いは展開されている。「世襲財産のポピュリズム」(D・ルニエ)である、西欧文明が誇る伝統的な価値である自由をイスラムやグローバル化、多文化主義から守るという立場がそこには見られる [Mayer 2012 : 157]。
- (32) マリーヌは従来のFNの言説を変化させている。女性の役割や家族観、性的マイノリティ、政教分離などに関して、極右のメンバーを不快にさせる言説が展開されている。それはマリーヌが戦略的に選択している言説であるが、他方で彼女が極右の活動家としてアイデンティティを形成するには遅れてきた世代であることも影響している。植民地独立、68年5月、共産主義、ミッテラン政権はマリーヌの世代は共有していないし、ルペンとは違って9・11事件、イスラム原理主義、金融危機、原発、多文化主義などを経験している。そのことはマリーヌも自覚していて、状況の変化とともに政治プログラムも変化することを認めている [Fourest et Venner 2011 : 150]。
- (33) マリーヌは自伝のなかで「ほぼ」という形容詞付きであるが自分がフェミニストであると述べており、PACSや妊娠中絶の容認は伝統的家族観・女性観に立脚してきたFNの党首としては画期的なことであった [Crépon 2012 243]。
- (34) マリーヌは性的マイノリティに寛容な姿勢を示していたが、実際、党内には同性愛者が存在していた。マリーヌの地方拠点であるエナン・ボーモン市長を勤めているS・ブリオワは、政治活動の盟友であるB・ビルドと同性カップルである。また、副党首で党ナンバーツーのPh・フィリップ(後に離党)も同性愛者であることを認めている。反同性愛の政党というイメージに反し、同性愛者のなかでFNは支持を広げている [国末 : 2017 : 142-145]。
- (35) ただ、習俗やライフスタイルに対する柔軟で寛容な姿勢から、文化リベラリズムに寛容なマリーヌ像は正しくない。マリーヌは、伝統的なFNの男女関係観、家族観と大きく断絶しているわけではないからである。2011年6月14日に、マリーヌは「フランス社会のルールの一つは男女間の婚姻である。そのようなルールを変えるのがポジティブなことだと私は思わない。何故なら、その原則から外れると、文明の変質、究極的には一夫多妻制へと限りなく遠くまで行ってしまう可能性があるからである」と述べており、

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム-変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

伝統的な結婚観、家族観を基本的に支持している [Ivaldi 2012 : 104]。

- (36) FNの政権担当能力への不信という認識は正鵠を得たものであった。例えば、2011年1月25-26日に実施された世論調査によれば、マリーヌは「勇敢」であり(68%)、「フランス人を理解する能力」(50%)については評価されているが、「国をいい方向に改革できる」(29%)、「共和国のよき大統領になる」(18%)、「外国に対してフランスを代表できる」(16%)、「政府に参画する能力」(25%)と、政権担当能力についての信頼性は低かった [Dézé 2012 : 16]。
- (37) 「普通の政党化」の足を引っ張っていたのは名誉党首のルペンであった。2011年7月22日に起こった極右青年によるオスロでの爆弾テロと青年キャンプでの銃乱射事件について、ルペンはFNのウェブサイト上でのインタビューで『『アクシデント』と性格づけられる凶悪な狂人が犯した大量虐殺よりも移民についてのノルウエー政府の無邪気さの方が深刻』であるというメッセージを発した。左右両翼の政党はFNが変わっていない証拠としてルペンの失言を利用した [Machurete 2012 : 141-144]。これまでルペンの発言は歴史修正主義や反ユダヤ主義と非難され、輿論を買ってきた。それは、弱小な政党に世間の耳目を集めると同時に、党の独自性を示すための言説であったが、「普通の政党化」を目指すマリーヌにとってルペン流の「区別化戦略」は障害であった。
- (38) FNは2つの戦略の間で揺れ動いてきた。1990年代には、政権参加も視野に入れた「普通の政党化」=「適応戦略」と政界での孤立による独自路線=「区別化戦略」の間で揺れ動いてきた。その結果、党内には体制に対して強硬な姿勢をとる「アウトサイダー」路線と、体制に融和的な「インサイダー」路線が競合することになった (FNの二つの顔) [畑山 1997 : 127-128]。
- (39) マリーヌも、伝統的価値と秩序を重視する点ではこれまでのFNの連続線上にある。ゲッターのサブカルチャーを学校で禁止すること、徴兵制の復活、中高校での警備員や警官の導入、教育での伝統的価値の継承、街区での国旗の掲揚、古典的な教育方法と学級での権威の回復、服従と規律、敬意、労働、努力への嗜好の育成といったマリーヌの発言は、伝統主義的で権威主義的な社会・教育観を示している [Ivaldi 2012 : 104-105]。
- (40) 例えば、シモンはそのような連続性を認め、「ある意味では、マリーヌの新しいFNへの構想は、1990年代にメグレたち新右翼派が思い描きながら党の分裂で中断されたプロセスを再始動させるものであった」と指摘している [Simon 2011 : 127]。
- (41) FNは変わったという究極の演出であるが、マリーヌはついに党名変更に踏み切った。FNは2018年3月に開催された党大会で、「国民戦線 (Front national)」から「国民連合 (Rassemblement nationale)」に党名を変更した。それは党のイメージを大きく転換するための思い切った一手であった [朝日新聞, 2018年3月13日]。極右のイメージが付きまとった党名を変えることは「脱悪魔化」戦略の一環とも言えよう。ちなみに、「国民連合」の名称は、1986年の国民議会選挙で党外の保守系候補を擁立するために、その受け皿として設けられたもので、狭い極右の枠を越えて支持者を拡大するための開放戦略であった。その名称が採用されたことには、保守勢力と連携して支持者を拡大する意図が読み取れる。

参考文献

〈日本語文献〉

- 井出季彦 (2009) 『移民のフランスー「シテ」からみた大統領選挙ー』 西日本新聞社。
- 植村邦 (2002) 『フランス社会党と第三の道』 新泉社。
- 小熊英二 (2012) 『社会を変えるためには』 講談社。
- 長部重康 (1995) 『変貌するフランスーミッテランからシラクへ』 中央公論社。
- 尾玉剛士 (2017) 「[フランス] 巨大保守政党の結成, 右傾化戦略とその後の混迷ー21世紀の動向」, 阪野智一・近藤正基編『刷新する保守ー保守政党の国際比較』 弘文堂。
- 国末憲人 (2016) 『ポピュリズム化する世界』 プレジデント社。
- ー (2017) 『ポピュリズムと欧州動乱ーフランスはEU 崩壊の引き金を引くのか』 講談社。
- シリネリ, ジャン=フランソワ (川嶋修一訳) (2014) 『第5共和制』 白水社。
- 竹沢尚一郎 (2011) 「フランスにおける移民問題の複合性ーサンパビエと移民第二世代の視点から」, 竹沢尚一郎『移民のヨーロッパー国際比較の視点から』 明石書店。
- 伊達聖伸 (2018) 『ライシテから読む現代フランスー政治と宗教のいま』 岩波書店。
- 土倉莞爾 (2015) 「パスカル・ペリノーのフランス FN (国民戦線) 論」『法学論集』 第3号。
- ー (2016) 「変貌するフランス「国民戦線」(FN)」, 水島治郎編『保守の比較政治学』 岩波書店。
- 中山洋平 (1999) 「フランス」, 小川有美 (コーディネーター) 『国際情報ベーシックシリーズ EU 諸国』 自由国民社。
- ー (2016) 「福祉国家と西ヨーロッパ政党制の『凍結』ー新急進右翼政党は固定されるのか?」, 水島治郎編『保守の比較政治学』 岩波書店。
- 畑山敏夫 (1995a) 「『国民戦線』の自治体支配」『佐賀大学経済論集』 第32巻第1号。
- ー (1995b) 「フランス1968年5月ー政治的ユートピアの終焉」 岡本宏編『1968年ー時代転換の起点』 法律文化社。
- ー (1997) 『フランス極右の新展開ーナショナル・ポピュリズムと新右翼』 国際書院。
- ー (2007) 『現代フランスの新しい右翼ールペンの見果てぬ夢』 法律文化社。
- ー (2008) 「2007年大統領選挙とフランスの新しい右翼ールペンの敗北をめぐって」『佐賀大学経済論集』 第41巻第2号。
- ー (2012) 『フランス緑の党とニュー・ポリティクスー近代社会を超えて緑の社会へ』 吉田書店。
- 藤巻秀樹 (1996) 『シラクのフランスー新ゴースト政権のジレンマ』 日本経済新聞社。
- 水島治郎 (2016) 「『自由』をめぐる闘争ーオランダにおける保守政治とポピュリズム」, 水島治郎編『保守の比較政治学』 岩波書店。

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

— (2017)『ポピュリズムとは何か－民主主義の敵か、改革の希望か』中央公論新社。

宮島薔 (2016)『現代ヨーロッパと移民問題の原点－1970, 1980年代, 開かれたシチズンシップの生成と試練』明石書店。

モーリス・ラーキン (向井善典監訳) (2004),『フランス現代史－人民戦線期以後の政府と民衆』大阪経済法科大学出版部。

渡邊啓貴 (2015)『現代フランス－「栄光の時代」の終焉, 欧州への活路』岩波書店。

吉田徹 (2011)『ポピュリズムを考える－民主主義への再入門』NHK 出版。

〈外国語文献〉

Albertini, Pierre (1997), *La crise du politique. Les chemins d'un renouveau*, L'Harmattan.

Alidières, Bernard (2014), "Le temps du vote Front national et de ses representations" dans Giblin, Béatrice (sous la direction de), *L'Extrême droite en Europe*, Éditions La Découverte.

Amjahad, Anissa, et Jadot, Clément (2012), "Le modèle organisationnel du Front national" dans Delwit, Pascal (éd.), *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.

Bréchon, Pierre (2012), "La droite à l'épreuve du Front national" dans Delwit, Pascal (éd.), *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.

Chebel d'Appolonia (2015), "Immigration and the 2012. Elections in France" dans Goodliffe and Brizzi, Riccardo (éd.) *France after 2012*, Berghan.

Club de l'horloge (1985), *L'identité de la France*, Albin Michel.

Collovald, Annie (2004), *Le «Populisme de FN», un dangereux contresens*, Éditions du Croquant.

Corbière Alexis (2012), *Le parti de l'étrangère. Marine Le Pen contre l'histoire républicaine de la France*, Édition Tribord.

Crépon, Sylvain (2006), *La Nouvelle extrême droite. Enquête sur les jeunes militants du Front national*, L'Harmattan.

— (2012), *Enquête au cœur du nouveau Front national*, Nouveau monde éditions.

Delwit, Pascal (éd.) (2012), *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.

Dézé, Alexandre (2012) *Le Front national: à la conquête du pouvoir?*, Almand Colin.

— (2016), "Le changement dans la continuité: L'organisation partisane du Front national", *Pouvoirs*, no.157.

Fersan, Henri (1997), *Le Racisme anti-Français*, L'Ancre.

Fourest, Caroline et Venner, Fiammetta (2011), *Marine Le Pen démasquée*, Éditions Grasset & Fasquelle.

- Front national (1985), *Pour la France-programme du Front national*, Albatros.
- (1993), *300 mesures pour la renaissance de la France*, Éditions nationales.
- La Gauche forte (2014), *Le Guide anti-FN*, Éditions L'ai lu.
- Goodliffe, Gabriel (2015), "The Resurgence of the Front National" in Goodliffe, Gabriel and Brizzi, Riccardo(ed.), *France after 2012*, Berghahn.
- Igounet, Valérie (2014), *Le Front national de 1972 à nos jours*, Seuil.
- (2016), "La conversion social du FN,mythe ou réalité?", *Projet*, no.354.
- Ivaldi, Gilles (2012), "Permanences et évolutions de l'idéologie frontiste" dans Delwit, Pascal (éd.) 1, *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.
- (2017), "Forces et faiblesses du Front national", *Revue politique et parlrmntaire*, no.1083-1084.
- Lecœur, Erwan (sous la direction de), *Dictionnaire de l'extrême droite*, Larousse.
- Le Gall, Gérard (2017), "Victoire Macron, contingence et nécessité", *Revue politique et parlementaire*, no.1083-1084.
- Le Pen, Marine (2006), *À contre flots*, Grancher.
- Liszkai, Laszlo (2011), *Marine Le Pen. Un nouveau Front national*, Éditions Favre SA.
- Machuret, Patrice (2012), *Dans la peau de Marine Le Pen*, Seuil.
- Mandon, Aurélien (2013), *The Mainstreaming of the Extreme Right in France and Australia*, Ashgate.
- Manière, Philippe (2002), *La vengeance du peuple. Les élites, Le Pen, et les Français*, Plon.
- Mayer, Nonna (2012), "De Jean-Marie Le Pen à Marine Le Pen: l'électorat du Front national a-t-il changé?" dans Delwit, Pascal (éd.), *Le Front national. Mutations de l'extrême droite française*, Éditions de l'Université de Bruxelles.
- Mègret, Bruno (et als) (1992), *Le mondialisme. Mythe et réalité*, Éditions nationales.,
- (1998), *La Nouveau Europe. Pour la France et l'Europe des nations*, Éditions nationales.,
- Muxel, Anne (2012), "La tentation des partis extremists chez jeunes" dans Birgittta Orfali (sous la direction de), *La banalisation de l'extrémisme à la veille de la présidentielle. Radicalisation ou dé-radicalisation*, L'Harmattan.
- Ouraoui, Mehdi (2014), *Marine Le Pen, Notre faute. Essai sur le délitement républicain*, Michalon Éditeur.
- Perrineau, Pascal (2012), *Le choix de Marianne. Pourquoi, pour qui votons-nous?*, Fayard.
- (2014), *La France au Front*, Fayard.
- Philippot, Damien (2011), "2007-2011: le retour du Front national" *Revue politique et parlementaire*, no.1064.
- Raynaud, Philippe (2016), "La nébuleuse intellectuelle de Front national", *Pouvoirs*, no.157.
- Rosso, Romain (2011), *La face cachée de Marine Le Pen*, Flammarion.

マリーヌ・ルペンとフランスの右翼ポピュリズム－変容するフランス政治と「国民戦線(FN)」について考える(4)

Simon, Jean-Marc (2011), *Marine Le Pen, au nom du père*, Éditions Jacob-Duvernet.

Sineau, Mariette (2012), “D’un Le Pen l’autre: l’image du Front national à la veille de la Présidentielle de 2012” dans Birgitta Orfali (sous la direction de), *La banalisation de l’extrémisme à la veille de la présidentielle. Radicalisation ou dé-radicalisation*, L’Harmattan.

Taguieff, Pierre-André (2012), *Le nouveau national-populisme*, CNRS Éditions.

Turchi, Marine (2016), “L’Argent du Front national et des le pen. Une famille aux affaires”, *Pouvoirs*, no.157.